

句合の月

正岡子規

青空文庫

句くあわせ合の題がまわつて来た。先ず一番に月という題がある。凡そ四季の題で月というほど広い漠然とした題はない。花や雪の比でない。今夜は少し熱があるかして苦しいようだから、横に寝て句合の句を作ろうと思うて蒲団ふとんを被かぶつて驗温器を脇はきに挟みながら月の句を考えはじめた。何にしろ相手があるのだから責任が重いように思われて張合があつた。判者が外の人であつたら、初から、かぐや姫とつれだつて月宮に昇るとか、あるいは人も家もなき深山の絶頂に突つ立つて、乱れ髪を風に吹かせながら月を眺ながめて居たというような、凄すこい趣向を考えたかもしれぬが、判者が碧梧桐へきごとうというのだから先ず空想を斥しりぞけて、なるべく写実にやろうと考えた。これは特に当てこもうと思ふ訳ではないが自然と当てこむようになるのだ。

先ず最初に胸に浮んだ趣向は、月明の夜に森に沿うた小道の、一方は野が開いて居るといふ処あを歩行あるいて居る処であつた。写実写実と思つて居るのでこんな平凡な場所を描き出したのであろう。けれども景色が余り広いと写実に遠とほざかるから今少し狭く細かく写そうと思つて、月が木葉このはがくれにちらちらして居る所、即ち作者は森の影を踏んでちらちらする葉隠れの月を右に見ながら、いくら往ても往ても月は葉隠れになつたままであつて自分

の顔をかつと照す事はない、という、こういう趣を考えたが、時間が長過ぎて句にならぬ、そこで急に我家へ帰った。自分の内の庭には椎しいの樹きがあつて、それへ月が隠れて葉はごしにちらちらする景色はいつも見て居るから、これにしようと思つて、「葉隠れの月の光や粉砕す」とやつて見た、二度吟ぎんじて見るととんでもない句だから、それを見捨てて、再び前の森ぞい小道に立ち戻つた。今度は葉隠れをやめて、森の木の影の微風ゆすに揺らるる上を踏んで行くという趣向を考えたが、遂ついに句にならぬので、とうとう森の中の小道へ這入り込んだ。そうすると杉の枝が天を蔽おほうて居るので、月の光は点のように外に漏もれぬから、暗い道ではあるが、忽ち杉の木の隙間すきまがあつて畳一枚ほど明るく照つて居る。こんな考から「とところどころ月漏る杉の小道かな」とやつたが、余り平凡なのに自ら驚いて、三たび森沿い小道に出て来た。此度は田舎祭の帰りのような心持がした。もぶり鮓ずしの竹皮包みを手て拭ぬぐいてしぼりたるがまさに抜け落ちんとするを平氣にて提げ、大分酔がまわつたという見えで千鳥足おぼつかなく、例の通り木の影を踏んで走ある行いて居る。左側を見渡すと限りもなく広い田の稲は黄色に実りて月が明るく照して居るから、静かな中に稲穂が少しばかり揺ゆれて居るのも見えるようだ。いい感じがした。しかし考が広くなつて、つかまえ処がないから、句にならうともせぬ。そこで自分に返りて考えて見た。考えて見ると今まで木

の影を離れる事が出来ぬので同じ小道を往たり来たりして居る、まるで狐に化されたようであったという事が分った。今は思いきつて森を離れて水辺に行く事にした。

海のような広い川の川口に近き処を描き出した。見た事はないが揚子江であろうと思うような処であった。その広い川に小舟が一艘いっそう浮いて居る。勿論月夜の景で、波は月に映じてきらきらとして居る。昼のように明るい。それで遠くに居る小舟まで見えるので、さてその小舟が段々遠ざかつて終に見えなくなつたという事を句にしようと思うたが出来ぬ。しかしまだ小舟はなくならんので、ふわふわと浮いて居る様が見える。天上の舟の如しという趣がある。けれども天上の舟というような理想的の形容は写真には禁物だから外の事を考えたがとかくその感じが離れぬ。やがて「酒載せてただよふ舟の月見かな」と出来た。これが（後で見るとひどい句であるけれど）その時はいくらか句になって居るように思われて、満足はしないが、これに定きみようかとも思つた。実は考えくたびれたのだ。が、思うて見ると、先日うんぎの会に月という題があつて、考えもしないで「鎌倉や畠の上の月一つ」という句が出来た。素人臭い句ではあるが「酒載せて」の句よりは善いようだ。これほど考えて見ながら運坐うんぎの句よりも悪いとは余り残念だからまた考えはじめた。この時験温器を挟んで居る事を思い出したから、出して見たが卅八度しかなかつた。

今度は川の岸の高楼に上った。遥はるかに川面かわもを見渡すと前岸は模糊として煙のようだ。あるともないとも分らぬ。燈火が一点見える。あれが前岸の家かも知れぬ。汐しおは今満ちきりて溢あふるばかりだ。趣おもが支那の詩のようになつて俳句にならぬ。忽ち一艘の小舟（また小舟が出た）が前岸の蘆花の間より現れて来た。すると宋江そうこうが潯陽江じんようこうを渡る一段を思い出した。これは去年病中に『水滸伝すいこでん』を読んだ時に、望見前面、満目蘆花、一派大江、滔々滾々、正来潯陽江辺、只聽得背後喊叫、火把乱明、吹風胡哨趕将来、という景色が面白と感じて、こんな景色が俳句になつたら面白かろうと思うた事があるので、川の景色の聯想から、只見蘆葦叢中、悄悄地、忽然播出一隻船来、を描き出したのだ。しかしこの趣は去年も句にならなかったのであるから強いては考えなんだ。聯想は段々広がつて、舟は中流へ出る、船頭が船歌を歌う。老爺生長在江辺、不愛交遊只愛錢、と歌い出した。昨夜華光来趁我、臨行奪下一金磚、と歌いきつて櫓ろを放した。それから船頭が、板刀麵ばんとうめんが喰くいたいか、餛こんとんが喰くいたいか、などと分らぬことをいうて宋江を嚇おどす処へ行きかけたが、それはいよいよ写実に遠ざかるから全く考を転じて、使の役目でここを渡ることによさうかと思つた。「急ぎの使ひで月夜に江を渡りけり」という事を十七字につづめて見ようと思つて「使ひして使ひして」と頻しきりにうなつて見たが、何だか出来そうにもないので、復またも

との水楼へもどつた。

水楼へはもどつたが、まだ『水滸伝』が離れぬ。水楼では宋江が酒を飲んで居る。戴たいそ宗も居る。李逵りきも居る。こんな処を上品に言おうと思うたが何も出来ぬ。それから宋江が壁に詩を題する処を聯想した。それも句にならぬので、題詩から離別の宴を聯想した。離筵りえんとなると最早唐人ではなくて、日本人の書生が友達を送る処に変わった。劍舞を出しても見たが句にならぬ。とかくする内に「海楼に別れを惜む月夜かな」と出来た。これにしよう、きめても見た。しかし落ちつかぬ。平凡といえば平凡だ。海楼が利かぬと思えば利かぬ。家の内だから月夜に利かぬ者とすれば家の外へ持つて行けば善い。「棧橋に別れを惜む月夜かな」と直した。この時は神戸の景色であつた。どうも落ちつかぬ。横浜のイギリス埠頭場ふとうばへ持つて来て、洋行を送る処にして見た。やはり落ちつかぬ。月夜の沖遠く外国船がかかつて居る景色をちよつと考へたが、また棧橋にもどつた。棧橋の句が落ちつかぬのは余り淡泊過ぎるのだから、今少し彩色を入れたら善かろうと思つて、男と女と棧橋わかれで別を惜む処を考へた。女は男にくつついて立つて居る。黙つて一語を発せぬ胸の内に言うに言われぬ苦くるみがあるらしい。男も悄しょうぜん然として居る。人知れず力を入れて手を握つた。直に舢舨はしけに乗つた。女は身動きもせず立つて居た。こんな聯想が起つたので、

「棧橋に別れを惜む夫婦かな」とやったが、月がなかった。今度は故郷の三津を想像して、波打ち際で、別を惜むことにしようと思うたがそれもいえず。遂に「見送るや酔のさめたる舟の月」という句が出来たのである。誠に振わぬ句であるけれど、その代り大疵たいしもないように思うて、これに極めた。

今まで一句を作るにこんなに長く考えた事はなかった。余り考えては善い句は出来まいが、しかしこれがよほど修行になるような心持がする。此後も間ひまがあつたらこういうように考えて見たいと思う。

〔『ホトトギス』第二卷第二号 明治31・11・10〕

青空文庫情報

底本：「飯待つ間」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年3月18日第1刷発行

2001（平成13）年11月7日第10刷発行

底本の親本：「子規全集 第十二卷」講談社

1975（昭和50）年10月刊

初出：「ホトトギス 第二巻第二号」

1898（明治31）年11月10日

※底本では、表題の下に「子規」と記載されています。

※「此後も間《ひま》があったら」の「間」のみは、底本では「門く月」となっています。

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年4月22日作成

2011年5月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

句合の月

正岡子規

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>